

郡上八幡におけるまちの近代化と郡上おどりの継承に関する研究

A Study on the Relationship between Modernization of Town
and Inheritance of Gujo Odori in Gujo Hachiman

永松 明奈
NAGAMATSU Akina

1. 序論

(1) 研究背景と目的

もともと城下町であった岐阜県郡上郡八幡町（現郡上市八幡町、以下、郡上八幡）は藩政時代、北町（郡上八幡城を中心に武家地が多くを占めた吉田川の北側）と南町（町人地が多くを占めた吉田川の南側）に分かれていた。正調郡上おどり（以下、郡上おどり）は、藩政時代から北町と南町の両方で行われてきており、現在は郡上おどり保存会が中心となって運営されている。複数の縁日おどりによって構成される郡上おどりは、平成8年（1996）に国の重要無形民俗文化財に指定され、令和4年（2022）には民俗芸能「風流踊」の一つとしてユネスコ無形文化遺産に登録された。文化財保護行政は近年、文化財の保護だけでなく活用にも取り組んでいる。無形民俗文化財は、人の活動によるところが大きく、有形文化財よりも維持継承することが難しく、変化が起こったこと自体も捉えにくいとされている¹。郡上八幡では、まちの近代化や観光化が見られる。こうした状況において、郡上おどりがどのように展開し、継承されてきたのかを明らかにすることは、社会環境が変化する中、無形民俗文化財の継承と活用を検討するに当たって意義あることといえる。

郡上おどりに関して、伝統の維持と新たな創造に関する先行研究は見られたものの、まちの近代化が郡上おどりに与えた影響や、郡上おどりを構成する縁日おどりの開催場所の変遷への言及はない。

本研究では、郡上八幡の近代化とともに、どのように郡上おどりが継承され変化してきたのかを、本来地域社会が異なっていた北町・南町ごとに変遷を把握するとともに、現在における主体の取り組み内容から明らかにし、今後の郡上おどりの在り方について示唆を得ることを目的とする。

(2) 研究方法

郡上おどり継承の中心である郡上おどり保存会設立から現在に至るまで、郡上おどり保存会の取り組みや郡上おどりの観光化から、時期を7つに区分(①郡上おどり保存会設立期、②外部発信期、③観光化期、④観光客受け入れ強化期、⑤郡上おどり400周年記、⑥コロナ禍による中断期、⑦郡上おどり保存会設立100周年期)し、北町・南町ごとに縁日おど

りの開催場所とその要因を、文献調査や現地調査から把握した。次に、現在郡上おどりを担う主体の活動内容とその動機を、長期的に郡上おどりの保存・運用に取り組んできた主体(郡上おどり保存会A氏、郡上おどり運営委員会事務局B氏)と、郡上おどりにおける新たな取り組みをしている主体(郡上節ガールズバンドC氏・D氏、株式会社オドルキカクE氏)、地元住民(郡上八幡在住70代男性F氏(元役所勤務))へのヒアリング調査から把握した。地元住民の意見は、補足として郡上おどり保存活用計画に向けた住民参加ワークショップ²の記録も参照した。

2. 郡上八幡と郡上おどり

郡上八幡は岐阜県中央の山間部にあり、中心には吉田川が流れる。交通の要所として江戸時代から栄え、水の町としての歴史的な町並みが現存している。主な産業は観光サービス業で、年間観光客数は約100万人である。現在、北町には藩政時代の藩主に関する施設(郡上八幡城や寺社など)と、武家用地の転用による観光拠点施設がある。南町には廃藩後の行政施設(旧庁舎記念館や現市役所など)がある。「重要伝統的建造物群保存地区」は北町のみが選定され、郡上市歴史的風致維持向上計画の重点地域である「郡上踊にみる歴史的風致」には、北町と南町の両方が含まれている。

郡上おどりは約400年前から行われており、7～9月の約30夜に実施する国内で最長期間の祭りである。縁日おどりは多数あり、縁日おどりごとに開催場所と日程が決められている。計10曲、踊り屋形を囲む輪踊りであり、誰でも踊りに参加することができる。大正11年(1922)、郡上おどり保存会設立から、観光化と文化財登録が進められてきた。



図1 郡上踊りの開催場所(2023年) 筆者作成

3. 郡上おどりの変遷と郡上おどり保存会の動き

時期区分ごとに縁日おどりの開催場所を見ると（表1）、多様な祭礼や催事が、郡上おどり保存会による踊りの統一化と、外部への発信や観光客の受け入れ強化といった郡上おどりの観光化、役場の建設や都市公園および文化施設の整備といったまちの近代化・観光地化に即して縁日おどりとして追加され、現在の郡上おどりとなった。もともと寺社で行われていた北町では、観光客の増加とともに安全性確保ため町中で行われるようになり、その後、武家用地の転用による文化施設（ホテル積翠園や城下町プラザなど）で開催されるようになっていた。寺社があったものの、もともと町中で行われていた南町では、廃藩後に整備された役場（旧庁舎記念館前）や都市公園でも開催されるようになった。結果として、現在の郡上おどりは、北町・南町ともに町中を中心とした開催となっていた。それに伴って、名称が変更（もともとの開催場所を追加）したおどりもあった。

4. 郡上おどりを担う主体の継承への取り組み

現在、郡上おどりの直接的な運営は、郡上おどり保存会と郡上おどり運営委員会事務局（郡上市商工観光部観光課）が担っており、新たな取り組みをしている主体の関与は見られなかった。新たな取り組み主体は、郡上おどり以外場で、それぞれ郡上おどりを発信するなど、郡上おどりの運営と発信といった分業体制となっていた。今後の郡上おどりのあり方について、郡上おどり保存会は縁日おどりの由

来への回帰、株式会社オドルキカクは新たなターゲット層の獲得、郡上節ガールズバンドは自分たちらしい演奏や衣装、地元住民は昔のような自由さや外部との交流など、今回のヒアリング対象者全員が郡上おどりの新たな楽しさを見つけることとしていた。

5. 結論

本来、大きくは寺社で行われていた北町の縁日おどりと、町中で行われていた南町の縁日おどりは、保存会によるおどりの観光化（踊りの統一化による分かりやすさ、外部への発信、観光客への指導）、まちの近代化（役場や都市公園の整備）および観光地化（文化施設の整備と安全性確保）に伴って、「郡上おどり」として開催場所及び内容が同質化することとなっていた。ただ、現在全ての縁日おどり運営を担っている郡上おどり保存会への負担は大きい。今後は、今回ヒアリング対象とした新たな取り組み主体や、各縁日おどりにもともと由縁する各開催場所の町内会などの関係団体なども含めて運営主体とし、郡上おどり保存会と緩やかな連携を図ることで、観光客だけでなく地元住民も楽しみながら踊りに参加することが求められる。

- 1) 足立 重和, (2004), 地域づくりに働く盆踊りのリアリティ : 岐阜県郡上市八幡町の郡上おどりの事例から, フォーラム現代社会学, 3巻, 83-95
- 2) 郡上市, (2024), 『郡上おどり保存活用計画』資料編, 51

表 1 縁日おどりの変遷一覧

縁日名称*	開催場所	実施年	①郡上おどり保存会設立期	②外部発信期	③観光化期	④観光客受け入れ強化期	⑤郡上おどり400周年期	⑥コロナ禍による中絶期	⑦郡上おどり保存会設立100周年期	縁日名称 (2023年)	開催場所 (2023年)
天王祭	八坂神社	1923年	●	▲	★	★★	▲	オンライン		八坂神社天王祭	上坂町
毛付夏祭	殿町	1932年				★★	▲			毛付市 希路市 瓦部町 重祭	積翠園前
毛付夏祭	殿町	1932年				★★	▲			毛付市 岩崎神社川祭・凌龍陣慰霊	城山公園
三十番神祭	大蔵寺	1923年	●			★★	▲	オンライン		大蔵寺三十番神祭	本町
山内一豊夫人千代のタベ	城山公園	1998年					●			山内一豊夫人千代のタベ	城山公園
およし祭	殿町	1947年				▲				およし祭	下坂町
地蔵祭	城山	1947年			●★★	▲				城山地蔵祭	大町
生神祇民祭	風光センター	1977年				▲				生神祇民祭	積翠園前
弁天七夕祭	洞泉寺	1923年	●			★★		オンライン		洞泉寺弁天七夕祭	本町
納涼祭	城下町プラザ	2001年					●			納涼祭	城下町プラザ
宗祇水神祭	本町	1923年	●				★			宗祇水神祭	本町
大神祭	八幡神社	1961年				●		オンライン		小野天神祭	八幡神社
神農祭	八幡神社	1961年				●				おどり発祥祭	旧庁舎記念館前
神農祭	歩道	1932年		●▲			▲			下町神農祭	旧庁舎記念館前
大鳴水神祭	役場前	1977年				●				大鳴水神祭	旧庁舎記念館前
電気地蔵祭	常盤町	1923年	●				▲		▲	常盤電気地蔵祭	旧庁舎記念館前
乙姫祭	立町	1947年								乙姫水神祭	旧庁舎記念館前
秋葉祭	今町	1932年		●		●				秋葉祭	今町
恵比須祭	新栄町	1952年				●				恵比須祭	新栄町
秋葉祭	日吉町	1952年				▲	★★			秋葉祭	下日吉町
志蘭盆会	橋本町	1923年	●			▲		オンライン		志蘭盆会	新町～橋本町
志蘭盆会	新町	1932年		●			▲	オンライン		志蘭盆会	新町～橋本町
志蘭盆会	新町	1932年		●			▲	オンライン		志蘭盆会	橋本町～新町
十八観音祭	愛宕町	1923年	●		▲					十八観音祭	下愛宕町
日吉神社祖霊祭	立町	1993年					●			日吉神社祖霊祭	本町
地蔵祭	棚形町	1923年	●			▲		オンライン		棚形地蔵祭	上棚形町
婦人の夕	役場前	1961年				▲	▲			女性の夕	新町
本年最後の夕	役場前	1961年				▲	▲	オンライン		おどり納め	新町～今町
記念日	八幡駅前	1932年		●	★				▲	越美南線開通記念祭	郡上八幡駅前
郡上おどり保存会の取組	踊りの統一 文化財登録の進行 郡上おどり保存委員会の設置 郡上おどり保存活用計画の策定										● 縁日おどりの追加 ▲ 開催場所の変更 ★ 名称の変更
郡上八幡のまちの出来事	北町大火の復興 役場庁舎の開設 郡上八幡駅の開設 複次文化施設の開設 郡上市歴史的風致維持向上計画に認定										*: 文献で確認された最古の表記

Abstract: This study clarified the relationship between modernization of town and inheritance of Gujo Odori in Gujo Hachiman. With the modernization of the town, administrative functions moved from Kitamachi to Minamimachi. The modernization of the town led to the opening of several tourist facilities in Kitamachi, and the increase in the number of tourists participating in Gujo Odori led to the change in the venue to larger areas to ensure safety. As a result, the location and content of Gujo Odori has become homogenized. This is due to the many activities of the Gujo Odori Preservation Society, which is the main operator of the festival. The burden is heavy, so in the future, more entities should participate in the operation and the diverse characteristics of Gujo Odori should be demonstrated once again.